

秋田県立博物館分館 見学のしおり

重要文化財 旧奈良家住宅



●旧奈良家住宅

旧奈良家住宅は、江戸時代中ごろ（1750年代）に奈良善政（喜兵衛）によって建てられました。この建築にかかわるリーダーは土崎の間杉五郎八という人で、完成まで3年と銀70貫（現在のお金で約6,500万円）の費用がかかったといわれています。

●建物の特徴

家屋の広さは424.05㎡（128.5坪）あります。両中門造りという作り方で、建物の正面の左右に出入り口があります。これは秋田県中央海岸部での代表的な農家の建て方です。奈良家の場合正面に向かって左側を上手中門（座敷中門）、右側を下手中門（厩中門）と言います。上手中門は座敷へ通る出入り口です。下手中門は土間へ通る出入り口で、主に一般の人が使いました。厩中門とも呼ばれるように、入るとすぐ右側に馬屋があります。馬は大切にされていたので、暖房費の節約や健康を観察するために人と同じ屋根の下にいらしていました。建物の北側には勝手口もあります。また、作業をするための広い土間があります。

日本の古い建物は、柱などの骨組みの材木が縦横に組み合わせられて丈夫にできています。旧奈良家住宅も建てられてから今までいくつもの大地震にあいましたが、倒れたことはありません。

屋根はかやぶきといって、ススキやヨシという草を厚く重ねてのせて作っています。雨水が集まって流れる部分などは、特に丈夫にするため杉の皮を使っています。屋根のかやは、日にちがたつとともに少しずつ押しつぶされて、屋根にすき間ができます。そこで、定期的にかやを足して屋根にすき間ができないようにします。

かやぶき屋根や板壁、ちょうなという道具を使っただけの残る材木からも、古い建物の作り方がわかります。また、入母屋という下手中門の屋根の形や書院造り風の座敷などからは、豪農（大きな百姓）の当時のくらしが感じられます。このように旧奈良家住宅は秋田県中央海岸部の大型農家建築物として、建てられた当時の形がよく残っており、建てられた年代も明らかことから、昭和40年（1965）5月29日に国の重要文化財に指定されました。

旧奈良家住宅に集められた
昔の道具から

農具



かたわく (田植えの印をつける道具)



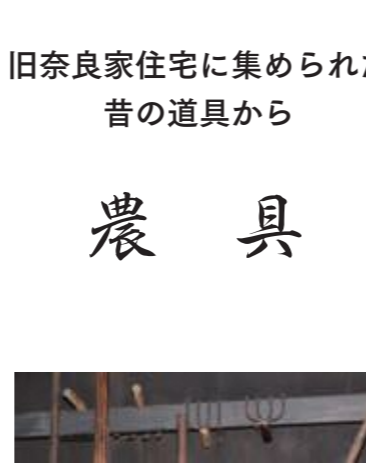
いろいろな鎌 (くわ)



ふみ鋤 (すき)



ドロマシ取り



草取り



ガンヅメ (田の草取りの道具)



千歯 (せんぱ) こき (イネの脱穀道具)



万石通し (米をふるい分ける)



唐箕 (とうみ / 玄米とモミ殻を分ける)



大足 (田を踏んで土を砕き草を沈める)



あしふみ脱穀機



横槌 (よこづち)



木の皮で作った箕



イタヤで作ったジョウゴ



臼 (うす) と杵 (きね)



米を量るマス



ふみ車 (田より低い堰 (せき) から水を揚げる)



ツメゾリ (材木用、イネや堆肥も通んだ)



ふくべ (もみを入れる)



馬のはきもの、くつわ、あぶみ、など



はたご (ムシロを織る)



重い物を量った大きな竿秤 (さおばかり)

利用のご案内

開館時間 9:30~16:30 (4月~10月)
9:30~16:00 (11月~3月)
休館日 ・毎週月曜日
(ただし、休日と重なったときは、次の平日)
・全館くん蒸期間、年末年始
入館料 無料



〒010-0124 秋田市金足鳩崎字後山5-2
TEL 018-873-4121 FAX 018-873-4123
URL <http://www.akihaku.jp>

秋田県立博物館分館 重要文化財旧奈良家住宅の周辺



○台所

調理や配膳をしたり、家の者が食事をしたりしました。ただし、ここに流しはなく、かまどの横にあります。



台所

○なんど

主人夫婦の寝室です。布団を入れるたんすがあります。なんどの上は女中（女性の使用人のこと）の部屋で、物置代わりに使われました。



座敷



なんど

○上座敷・中座敷

身分の高い客のための部屋です。上座敷の仏壇は初めはおえの方を向いていました。

○ねま

若夫婦の寝室です。

○おえ

客の相手や仕事の打ち合わせ、使用人への指示、帳付けや書き物をする部屋です。初めは板敷きでしたが、江戸時代終わりごろから明治時代初めごろ（1860年代後半）にたたみを敷きました。はりや戸はけやきの木です。



おえ

○土間

屋内の作業場として使われました。冬に雪が積もって外で作業ができない地域の農家では必要な場所で、冬には秋に収穫した稲から米をつくる作業をしました。

土間の床は、固く締まった土です。粘土質の土に、塩やにがりをまいて打ち固めて作りました。脱穀、もみすり、選別、たわら詰めなどさまざまな仕事が行われました。

土間の隅には煮炊きをするかまどや、体や部屋を暖めたり煮炊きもしたりした地いろりがあります。ここは若勢（使用

●旧奈良家住宅の部屋と使われ方



○いなべや

刈り入れた稲を置いたところと言われますが、奈良家の田でとれたすべての稲を置くだけの広さはありません。脱穀などの作業をする分の稲を置く場所であったと思われます。（現在は農具を展示しています）



いなべや

○からうす場

からうすを置いた場所です。シーソーのようなしかけの片側に杵を取り付け、さらに石をくくりつけて重くしています。杵の下には臼があります。杵の反対側の端に足をかけると杵が持ち上がり、足を離すと杵が落ちて臼の中のものを強くはたきます。ここでは主に玄米を白米にしましたが、こざきなどをはたいて粉にもしました。



からうす場

○流し場・風呂場

洗い物をする場所で、大きな水ためと流しがあります。となりは風呂場で、水を使う場所はまとめられています。ここは井戸を掘っても良い水が得られないため、飲み水は初めは近くの井戸から水を運びました。後に近くの山から引くようになり、昭和30年代まで使いました。洗濯や風呂には井戸や男湯の水を使いました。



下手中門から土間を見る



馬屋



かまど

地いろり

土間

大黒柱

人のこと)の食事やいこいの場でもあったと思われます。地いろりには、木の枝分かれの部分を利用した大きな自在かぎがかけられています。これをかける縄はふじづるを何本もより合わせた丈夫なものです。

地いろりのそばには杉でできていて、すすで黒光りしている八角形の大黒柱があります。高さは8.6m、まわりは1.5mあります。地いろりのとなりに、馬を飼う馬屋があります。餌の入れ物をかけるかぎもあります。馬屋の上は、若勢が休んだ屋根裏部屋です。地いろりの横にあるはしごを伝って上り下りしました。